正　木　町　遺　跡

第５次調査の概要

１９９６

名古屋市教育委員会

例　言

1　本書は、名古屋市中区正木１丁目で行った正木町遺跡第５次発掘調査の概要報告書である。

2　調査は、株式会社大京のマンション建設に伴って、実施された。

3　調査面積は、約750m²、調査期間は、平成７年７月17日から９月30日であった。

4　調整は市教委文化財課小島一夫が担当し、発掘は見晴台考古資料館木村有作、伊藤正人、野口泰子が担当した。

5　排土工事は、株式会社渥美造園が工事請負で実施した。

6　写真測量は、国際航業株式会社名古屋支店に委託した。

7　本書に使用した海抜高は、東京湾平均海面(T.P.)を使用し、方位は国土座標第Ⅶ系による座標北を示した。

8　遺物整理には、中嶋理恵、岡部麻美、稲垣美生の協力を得た。

9　出土遺物及び記録等は、見晴台考古資料館で保管している。

10　本書の編集・執筆は、資料館学芸員の助言を得て、野口が担当した。

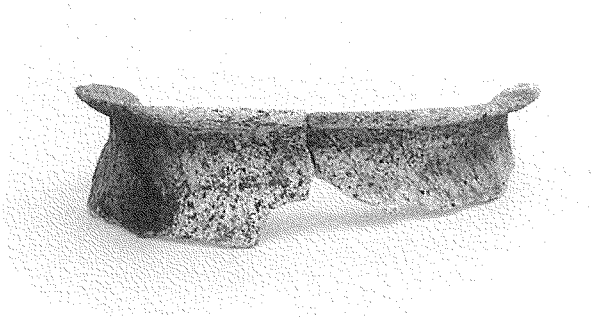
目　次

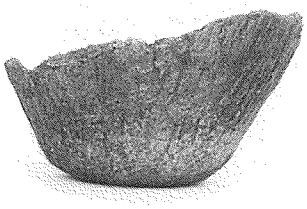
Ⅰ　位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の経過 …… 4

Ⅲ　遺構と遺物 …… 7

Ⅳ　まとめ …… 23





表紙写真　西半区全景

右上写真　ＳＢ４カマド出土　甕

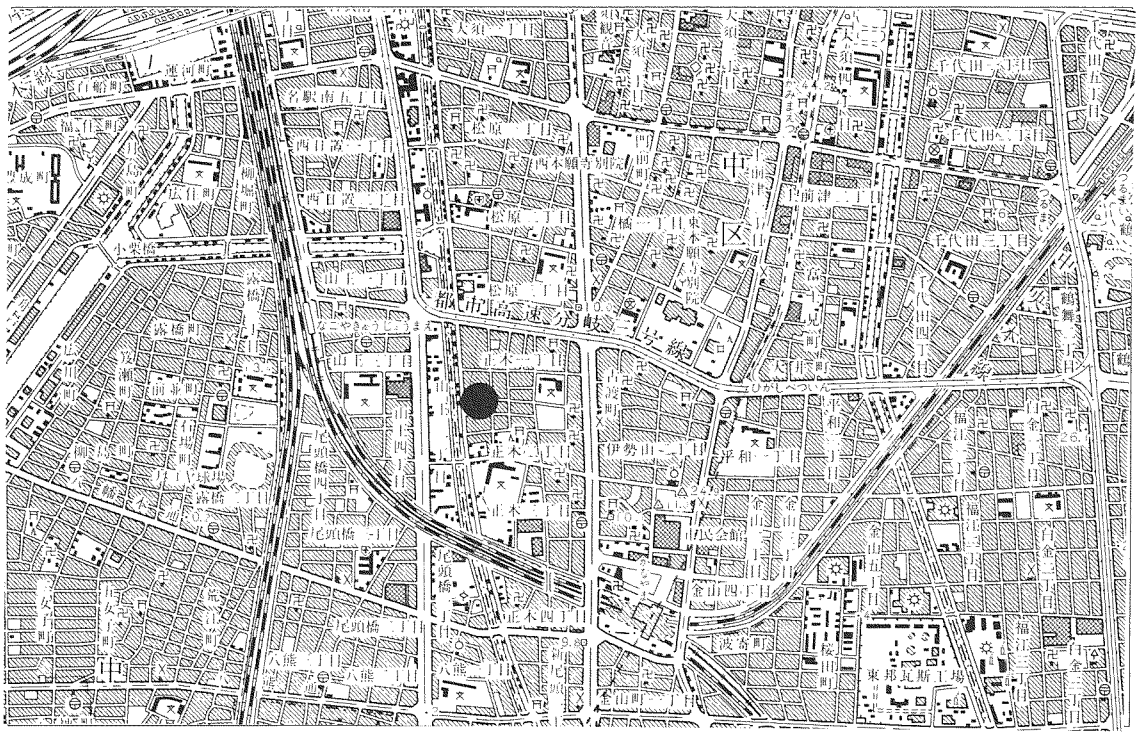
右下写真　ＳＢ２出土　甕

Ⅰ　位置と環境

名古屋の中心部の台地は、今からおよそ6万年前の洪積世後期に形成された熱田層によって構成され、河川の浸食等により開析を受け、いくつかの台地に分けられる。台地の北西端には名古屋城が、南西端には熱田神宮が位置し、西端は名古屋城築城に際して開削された堀川が流れ、その西には沖積平野が広がる。正木町遺跡は台地中央の堀川を臨む位置に立地する。遺跡は東西約330 m、南北約300 mが範囲と推定され、標高は8 m前後である。

正木町遺跡は、かっては正木町貝塚と呼ばれ、現在の遺跡推定範囲の北西部にあたる位置で、昭和26年に北村斌夫氏が貝塚から須恵器、滑石製剣形品、手持砥石等を採集し注目をされた。昭和27年に南山大学が調査をし、土師器、須恵器、滑石製小玉、鈴形石製模造品等が出土している(註1)。昭和44年、伊藤禎樹氏が県中央児童相談所敷地で行った調査では、不整形のカマドをもつ5世紀中葉～後半の住居跡が検出されたと報告されている(註2)。市教育委員会の調査は、昭和57年の試掘調査が最初の調査である。正木小学校校庭の南西にトレンチを入れた結果、弥生～奈良時代の遺物包含層が残存しているのが確認された(註3)。その後、4次にわたって調査が行われている。第1次調査(昭和60年)は遺跡北端の高速道路橋脚部分5カ所で行われ、奈良～平安時代の住居跡2軒や中世の遺構等が検出された。住居跡のうち1軒には土師器の甕底部を伏せたカマド状の遺構があった(註4)。第2・3次調査(昭和62・63年)は第1次調査の南側で行われ、7軒の住居跡と中世の溝等が検出されている。住居跡のうち4軒は古墳時代、残り3軒は奈良～平安時代と考えられている。古墳時代の住居跡のうち1軒は、一辺が約7 mある大型のもので古墳時代前期の可能性が高いという(註5)。第4次調査(平成3年)は遺跡推定範囲の中心部で行われ、4軒の古墳時代の住居跡、中世の溝等が検出され、韓式系土器や初期須恵器等が出土している(註6)。また、平成7年には南山大学が第4次調査の北側で調査をし、奈良・平安時代の井戸、V字形の溝等が検出され、古墳～近世に至る遺物が

図1　位置図(名古屋南部　1：25,000地形図　国土地理院発行)



出土されている(註7)。

隣接する伊勢山中学校遺跡でも５次にわたって調査が行われている。伊勢山中学校内や周囲で行った調査(第１～３・５次)では、古墳時代の住居跡が多数検出されている。第４次調査は遺跡の北側で行われ、中世の溝や16世紀前半と考えられるＶ字状の大溝が検出され、城館の存在が推測される。このＶ字状の溝は正木町遺跡第３・４次調査で検出された溝と類似している。第５次調査では古墳時代の住居跡や土師器・須恵器がまとまって出土した古墳時代の土坑も検出されている。

他の周辺遺跡をみてみると、北側の台地西縁には縄文土器の出土する岩井通貝塚や弥生土器・須恵器が出土する松原遺跡等がある。南に位置する尾張元興寺跡は白鳳時代の瓦が出土する古い寺院跡であるが、古墳時代の遺構や遺物も検出されている。台地東縁の富士見町遺跡では弥生時代中期の貝塚や、奈良・平

図２　周辺遺跡分布図

７－８　那古野山古墳
(古墳)

７－９　浅間神社古墳
(古墳)

７－11　岩井通貝塚
(縄文・弥生・中世)

７－12　旅籠町遺跡
(縄文・古墳・中世)

７－13　日置城跡
(中世～近世)

７－14　西脇町遺跡
(弥生)

７－15　大須二子山古墳
(古墳)

７－16　松原遺跡
(弥生・古墳・中世)

７－17　古渡城跡
(弥生・戦国)

７－18　富士見町遺跡
(弥生・古墳・中世・近世)

７－19　正木町遺跡
(弥生～江戸)

７－20　伊勢山中学校遺跡
(弥生・古墳・中世)

７－21　古沢町遺跡
(縄文～奈良)

７－22　尾張元興寺跡
(奈良～中世)

７－23　東古渡町遺跡
(弥生～中世)

(名古屋市遺跡分布図(中区)より)

安時代の住居跡等が確認されている。その南側の古沢町遺跡では工事の際に縄文土器や弥生土器が出土しているが、近年行われた調査では弥生時代後期の方形周溝墓の溝、古墳時代の住居跡、中世の溝等が検出されている。金山総合駅南の東古渡町遺跡では5次にわたる調査が行われ、弥生時代の住居跡、古墳の溝、奈良～平安時代の住居跡、中世の住居跡等が検出され、特に、古墳(方墳)は10基を超える。更に南側には弥生時代を代表する遺跡である高蔵遺跡が分布し、最近では古墳の溝や奈良時代、中世の遺構等が報告されている。

註1　稲垣晋也　愛知県名古屋市正木町貝塚　日本考古学年報5　昭和27年度　日本考古学協会編纂
註2　伊藤禎樹　正木町遺跡調査速報　名古屋考古学会会報　No.12　1969
註3　名古屋市見晴台考古資料館　昭和57年度　埋蔵文化財発掘調査概要報告書　名古屋市教育委員会　1983
註4　名古屋市見晴台考古資料館　正木町遺跡発掘調査概要報告書　名古屋市教育委員会　1986
註5　名古屋市見晴台考古資料館　正木町遺跡第2次発掘調査概報　名古屋市教育委員会　1988
　　名古屋市見晴台考古資料館　正木町遺跡第3次調査概報　名古屋市教育委員会　1989
註6　名古屋市見晴台考古資料館　正木町遺跡第4次発掘調査概要報告書　名古屋市教育委員会　1991
註7　南山大学正木町遺跡調査会　現地説明会の資料より

図3　調査区位置図

II　調査の経過

今回の調査地点は、遺跡の推定範囲の西端にあたり、調査地点のすぐ西は崖となり100mほど西には堀川が流れる。調査は、株式会社大京がマンションを建設するのに先立ち実施した。現況は工場が取り壊され、更地となっていた。西側は高さ５mほどの急斜面の崖となり、木材工場が崖際に立っている。斜面の石垣は、昭和20年代に手作りしたものということであった。石垣は強度に問題が在りそうなため崖からの距離を充分確保し調査区を設定することとなった。調査対象面積は約750m^2、調査期間は平成７年７月17日から９月30日の予定であった。排土の置場を確保する必要があるため２区(前半を西半区、後半を東半区)に分けて調査を行った。

７月17日、基準点測量をし、19日より重機による表土除去を開始する。西側は包含層はなく、近代の大土坑や防空壕による破壊を受けているが、黒褐色土を埋土とする溝や茶褐色土を埋土とする遺構等が検出されている。当初、西の崖近くは地山面まで削られ、流れ込んだ土が埋まっていると予想したが、現在の崖は工場などの建設によって削られたもので、かってはもっと西側まで台地が続いていたと考えられる。中央部では茶褐色土を埋土とする大きな溝状の落込みが検出される。南東側は別の遺構と重なっているようだ。南東から掘削を始めるが、茶褐色土は60～80cmほどの厚さで堆積し、西半区の東端まで続いており、人力による掘削だけでは完掘が難しいため、重機による掘削も併行して行うこととなった。底部ではピットが検出される。このピットはスコップが届かなくなるほど深いものもあり、規則的に配置されているようで柱穴跡と思われる。数軒の総柱式の建物があったようだ。連日の暑さのため作業はあまりはかどらない。北側は、工場のガラがかなり深く埋められており、廃液状のものが染み出してくる。地山面より深く掘られているため北端の掘削は放棄した。８月16日、西半区の掘削を終了し、18日、クレーンによる写真撮影を行う。８月24日より東半区の表土除去を開始する。包含層は茶褐色土で、東側では灰～茶褐色土を埋土とする遺構と須恵器が目立ち、住居跡を３軒分検出する。焼土の目立つ土坑を掘り始めたところカマドのような形状になってきた。土坑としたのは重なった住居跡のコーナー部分でカマドは住居跡の内側に位置する。他に溝やピット等遺構が多くあり、切り合いの確認が難しい。出土遺物は土師器甕と８世紀頃の須恵器が多いようである。西半区で検出された大溝の東肩の検出をしていく。やはり底面では並んだピットが検出される。９月20日、掘削を終了する。21日、クレーンによる空中写真撮影をする。その後、カマド内の埋土掘り下げ、ＳＤ２の中央に残してあった畦の掘削をし、ピットの検出・掘削・測量をする。調査区南・東壁面断面図作成等を行い、26日より埋め戻しをする。９月23日には、現地説明会を開催し、約120人の市民が訪れた。

発掘風景

図4　遺構図

III　遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代の溝、古墳～奈良・平安時代の溝・柱穴列・竪穴住居跡、中世の溝、近世の土坑、戦時中の防空壕跡等が検出され、各時代の遺物がコンテナケース30箱分出土している。層位は、調査区東側で、上から表土、暗灰黄色土(５～15cm)、淡褐色土(10～30cm)、茶褐色土(10～30cm)、(暗)灰褐色土(10～15cm)、部分的に黒褐色土(10cm)、地山となる。茶褐色土～灰褐色土からは土器、須恵器、山茶碗が出土している。西側は包含層が残存していなかった。

ＳＤ１(図５)　調査区西側で検出されている。幅は約２m、深さは検出した地山より約65cm、断面は逆台形を呈し、北北西から南南東に走る。埋土は黒褐色土を基調とし、最下層は黒みが強い。埋土中から土器片が出土しているが、小片のため時期等は不明である。

ＳＤ10(図５)　中央東寄りで検出されている。幅は約２m、検出長は約８m、深さは東側地山より約70cm、断面は逆台形を呈する。ＳＤ１と同様北北西から南南東に走っている。埋土は、両肩から底部に淡茶褐色土、中央部に黒褐色土がある。埋土上位～中位で弥生中期、高蔵期の土器がまとまって出土している。図６は広口壺である。口縁端部には波状文、上部には刺突列、扇状文、波状文、頸部には８条の沈線、刺突列、沈線が施され、胴上部には沈線、中位に波状文が施されている。器高は57.5cm、最大径は47cmである。図７の１は受口状広口壺、口縁端部は直立し、外面には３条の凹線と凸部には刻みが施されている。頸部には沈線、刺突列、沈線がある。２は細頸壺で頸部には沈線があり、胴上部には横線と沈線等が施され、縦位の沈線が３ケ所にある。３は甕、口縁は逆Ｌ字状に折れ、端部には刻み目がある。

Ｐ－59(図５)　調査区北西壁際で検出され、黒褐色土を埋土としている。径約１m、深さ約30cm、検出長約80cmで西側に続いていく。出土遺物はなかったが、埋土はＳＤ１・10に似ている。

ＳＤ１、ＳＤ10、Ｐ－59は同じ時期の遺構と考えられ、ＳＤ１とＳＤ10は平行する位置にあり、また、Ｐ－59は直交する位置にあることから方形周溝墓に伴う溝の可能性が高い。ＳＤ１とＳＤ10の間は約12.5m、ＳＤ10とＰ－59の間は方形周溝墓の陸橋部と推定され、幅は約90cmである。

図５　ＳＤ１・10、Ｐ－59

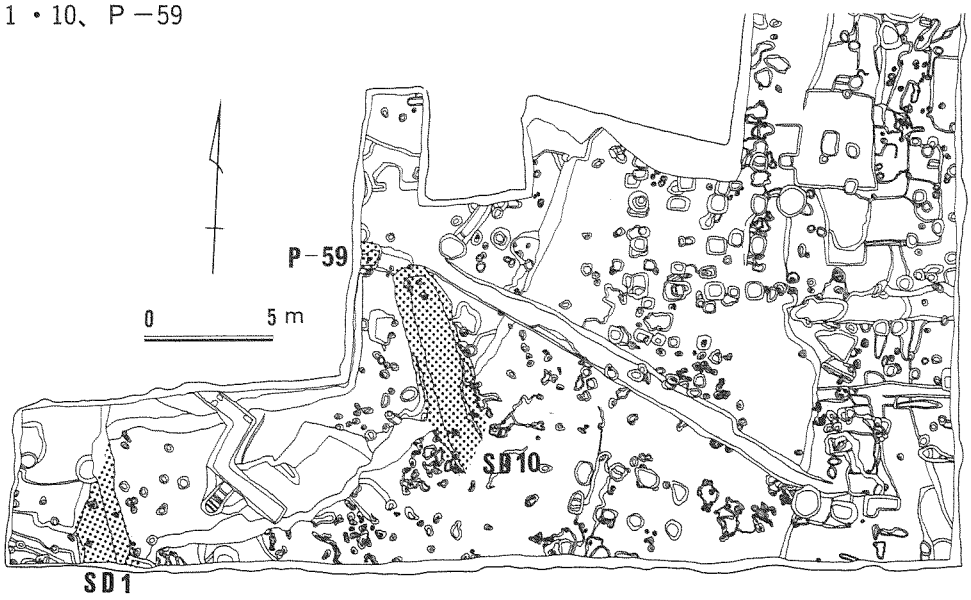


図6　ＳＤ10出土

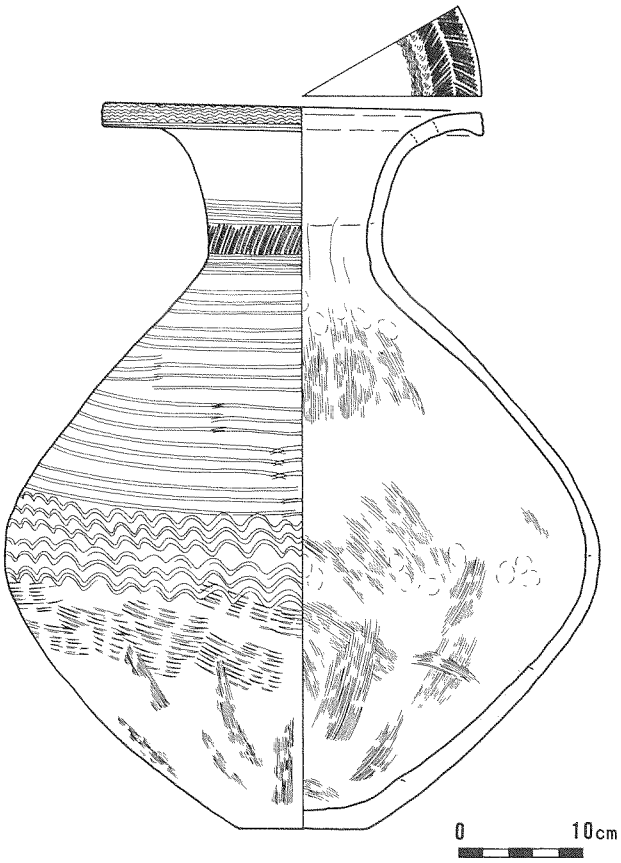
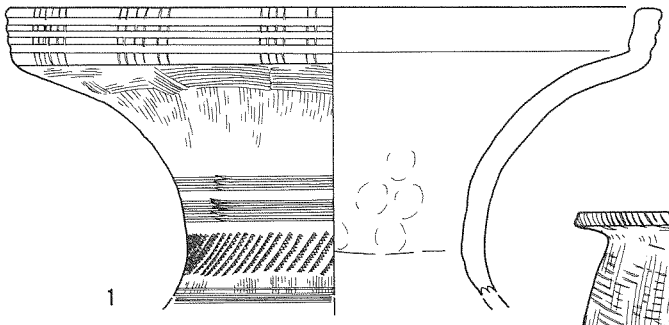
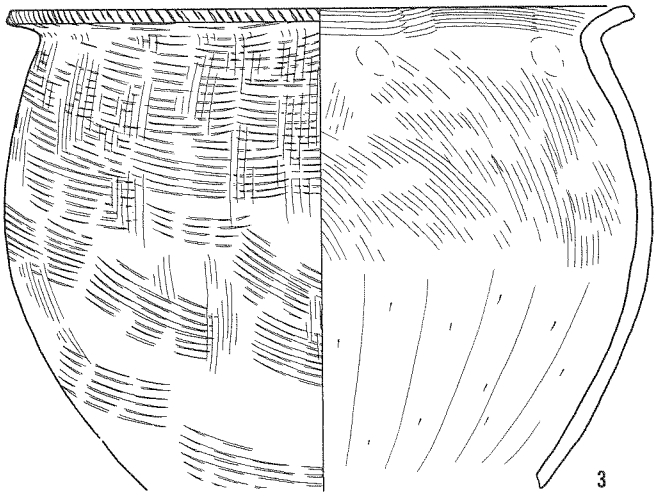
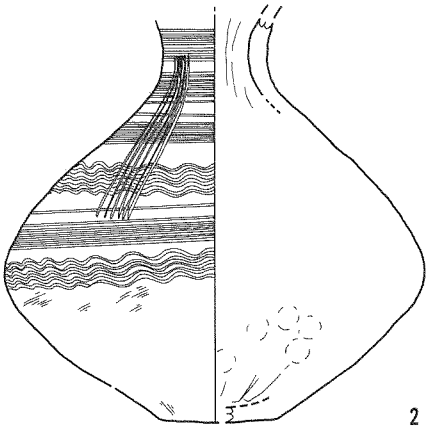


図7　ＳＤ10出土

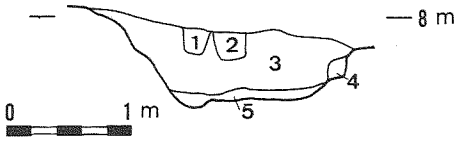






0　10cm

図８　ＳＤ１土層断面

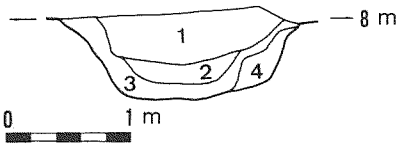


1　暗灰褐色砂質土
2　淡褐色砂質土
3　黒褐色土
4　黒褐色土(地山ブロックを含む)
5　黒褐色土(黒く、シルトがち)

ＳＤ１

ＳＤ10

図９　ＳＤ10土層断面



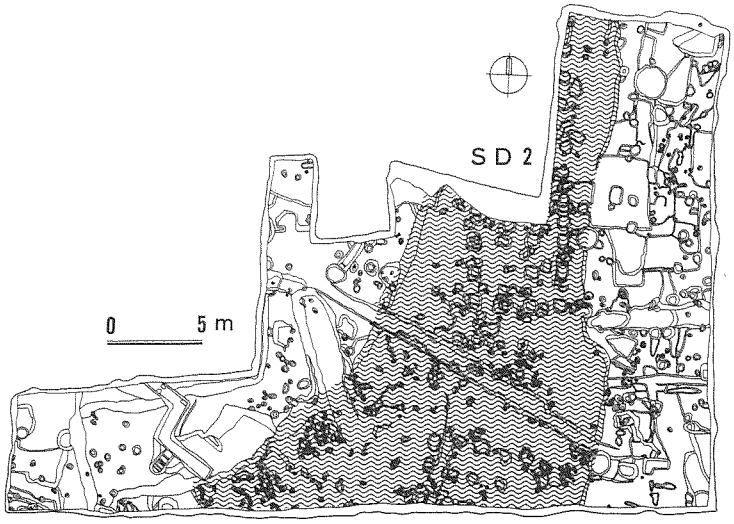
1　黒褐色土(黒く、シルトがち)
2　黒褐色土
3　暗茶褐色土(地山ブロックを密に含む)
4　暗茶褐色土(地山ブロックを密に含む、砂がち)

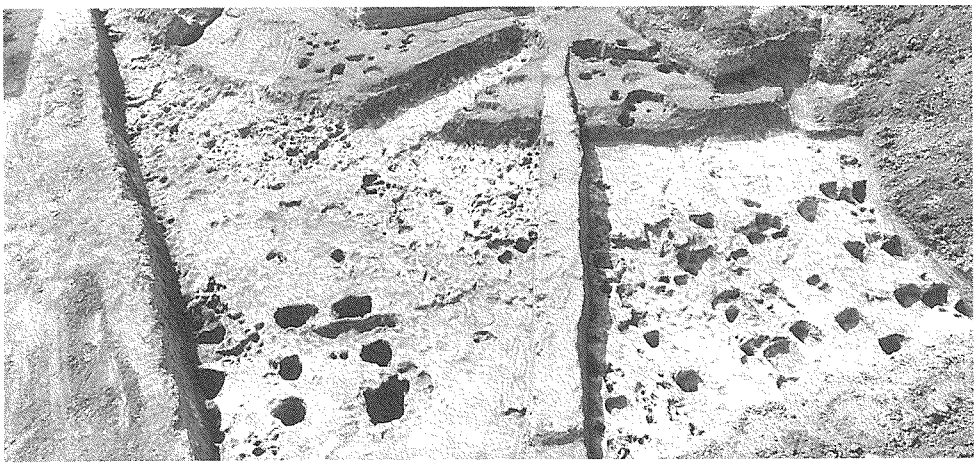
ＳＤ２(図10)　調査区の中央部に位置し、今回の調査面積の半分近くを占めている。北から南西方向に走る大溝で、幅は中央部で約9.5m、南側では12m以上になる。形状は、両肩が直線的に落ち込み、底部は中央に向かって緩やかに低くなっている。底部中央の標高は7.1m、底部端は7.3～7.4mである。溝西肩の地山の標高は８mほどである。南西側では土坑等と重なっている。西肩の形状ははっきりしないが、弧を描くように西に張り出し、この部分は弥生土器が集中しており、別の遺構が存在する可能性もあり、ＳＤ２はもう少し東よりを走ると思われる。また、南東側でも掘削中に確認はできなかったが、土層断面の観察から溝状の遺構と重なり、その部分が張り出し、やはり、弥生土器が集中して出土している。埋土は均質な灰褐色砂シルト、下位は場所によって、シルト質のつよい土層、砂質の強い土層、黒味のある土層、黄砂ブロックを多く含む土層等になる。遺物は、土器、須恵器等がコンテナ８箱分出土している。弥生土器は底部に密着した状態で出土し、南西側には壺底部、壺口縁部、高坏坏部片等がある。壺口縁部は内外面ともヘラ磨きされた径の大きなものである。南東側では、甕台脚、高坏脚部、壺胴部、手焙形土器片等がある。甕台脚は粗い右下がりのヘラ削り調整がされている。高坏の脚部はやや裾部が内湾し、孔が４孔あるが、1.5cm前後の間隔で２孔ずつ並び、両者の間は3.5cmほどあいている。壺は下胴部片で刷毛目が残る。手焙形土器はつばと開き口の一部の破片である。これらは弥生時代後期後半、欠山期に相当すると思われ

る。ＳＤ２の埋土下位から須恵器平瓶、高杯等が出土している。平瓶は頸部以上を欠くが、体部には丸みがあり、小型である。無蓋高杯は脚部が欠け、杯部は口縁端部まで真っ直ぐに立ち上がる。体部の立ち上がり際に沈線が１条ある。いずれも７世紀代であろう。遺物は整理途中であるが、他には８～９世紀代の須恵器が出土している。

ＳＤ２中央底面で方形に並んだ柱穴状のピット列(掘立柱建物)が検出されている。一番北側では南北に４基並び、その南に４基×４基と３基×３基が重なり、一部重なる位置で４基×４基、更に南に３基×３基が確認されている。ＳＤ２との関係は、土層断面の観察(図11　ＳＤ２とＰ164、Ｐ171)からＳＤ２の埋土の下にピットの埋土が残っており、ＳＤ２より古い時期のものとなる。ピットの埋土中からは須恵器の細片が出土しているが、時期等は不明である。

図10　ＳＤ２

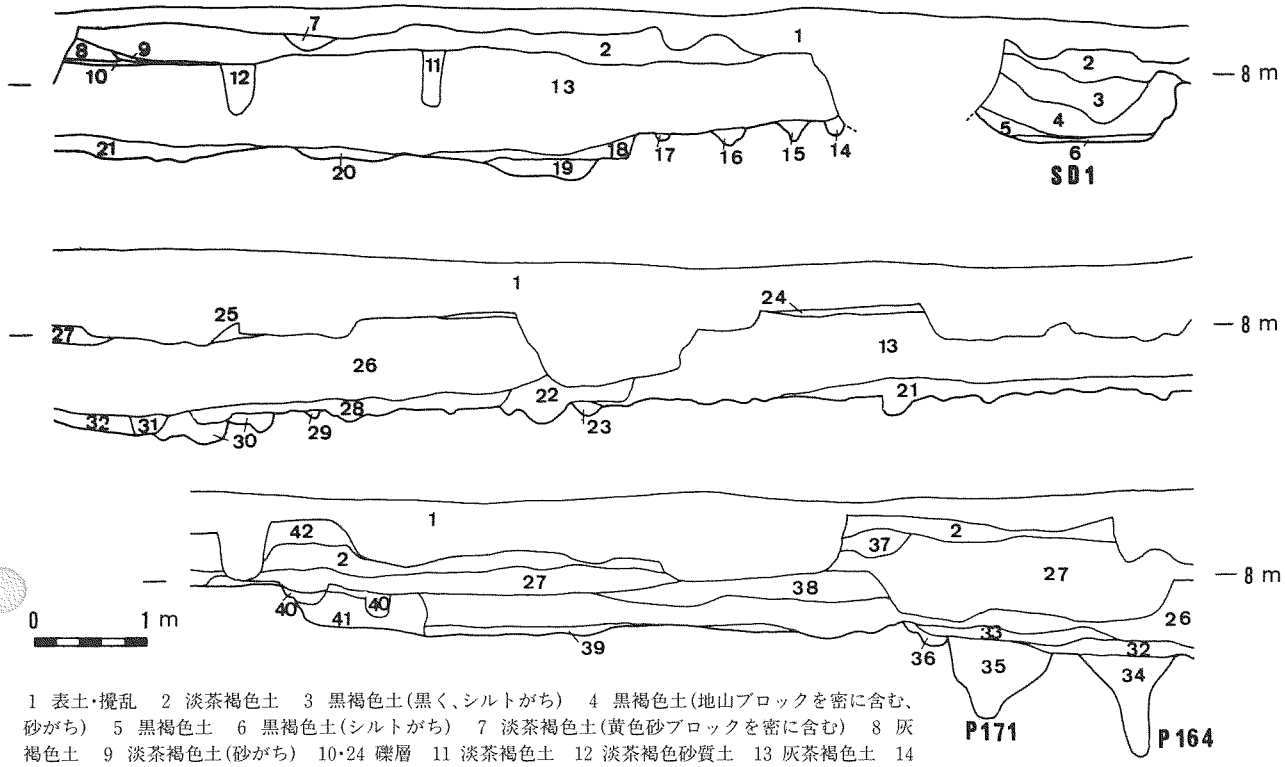




ＳＤ２(西半区)
南東から

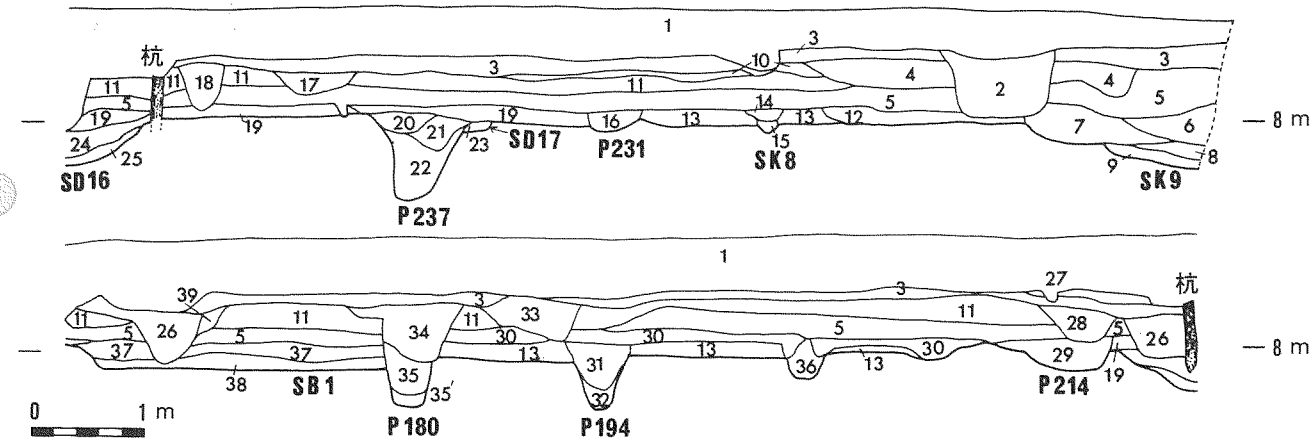
ＳＤ２(東半区)
北西から

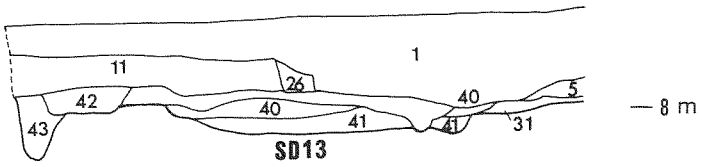
図11　ＳＤ２土層断面(調査区南壁)



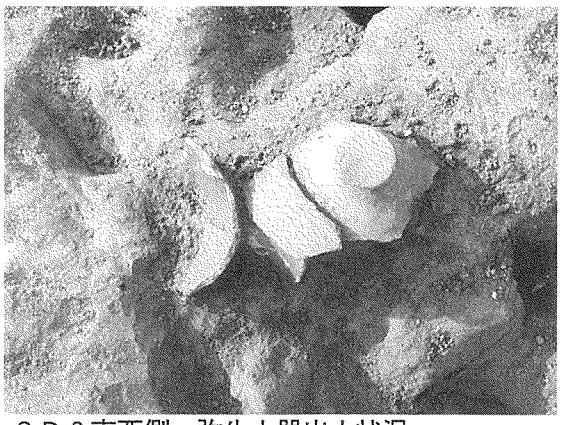
1 表土・攪乱　2 淡茶褐色土　3 黒褐色土(黒く、シルトがち)　4 黒褐色土(地山ブロックを密に含む、砂がち)　5 黒褐色土　6 黒褐色土(シルトがち)　7 淡茶褐色土(黄色砂ブロックを密に含む)　8 灰褐色土　9 淡茶褐色土(砂がち)　10・24 礫層　11 淡茶褐色土　12 淡茶褐色砂質土　13 灰茶褐色土　14 黄灰色砂質土　15・17 灰褐色シルト質土　16 灰褐色土　18・21 灰褐色土(砂がち)　19 淡灰褐色土(シルトがち)　20 灰褐色土(シルトがち)　22 灰褐色土　23 灰褐色土(黄色砂ブロックを含む)　25 茶褐色土　26 茶褐色土(やや灰色味がある)　27 茶褐色土(礫を含む)　28 淡灰褐色土　29 灰褐色土(シルトがち)　30 暗黄灰色砂質土　31 暗灰褐色土(砂がち)　32 淡灰褐色土(シルトがち)　33 灰褐色土(砂がち、黄色砂ブロックを含む)　34 暗灰褐色土(黒く、シルトがち)　35 黄灰色土(砂がち、黄色砂ブロックを含む)　36 灰褐色シルト質土(黄色ブロックを密に含む)　37 茶褐色土(礫を密に含む)　38 灰褐色土　39 暗灰褐色シルト質土　40 灰褐色土(シルトがち、黄褐色シルトブロックを含む)　41 暗茶褐色土(黄褐色シルトブロックを密に含む)　42 淡褐色土　ＳＤ２埋土 13、18～22、26、28、30～33、38、39

図12　調査区東壁土層断面





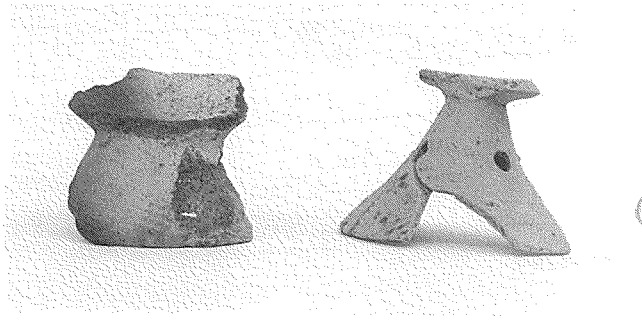
1 表土・攪乱　2 暗灰褐色土(砂がち)　3 灰褐色土(砂がち)　4 灰白色砂質土　5 茶褐色土　6 灰褐色土と黄褐色地山ブロックの混土－ＳＫ９埋土　7～9 暗灰褐色土(下層はシルトがち、黒い)－ＳＫ９埋土　10 淡褐色砂質土　11 淡茶褐色土(砂がち)　12 暗灰褐色土　13 黒褐色土　14 灰褐色土　15 暗灰褐色土　16 暗褐色土　17 淡褐色土(砂がち)　18 淡灰褐色土　19 暗灰褐色土　20～22 暗灰褐色土(黄褐色地山ブロックを下層程多く含む)　23 灰褐色土　24、25 黒褐色土(下層は黄褐色地山ブロックを密に含む)-ＳＤ16埋土　26 淡灰黄色砂質土　27 灰褐色砂質土　28 淡褐色砂質土　29 暗灰褐色土　30 淡灰褐色土　31、32 暗灰褐色土(下層は黄褐色地山ブロックを密に含む)　33 淡褐色砂質土　34 茶褐色土(礫を含む)　35、35' 褐色土(下層は黄褐色地山ブロック、黒色土ブロックが多くなる)　36 暗灰褐色土　37 暗灰褐色土(黄褐色地山ブロックを多く含む)－ＳＢ１埋土　38 灰褐色土－ＳＢ１埋土　39 明灰黄色土(砂がち)　40、41 黒褐色土(下層は黄褐色地山ブロックを多く含む)-ＳＤ13埋土　42 淡褐色土　43 茶褐色土



ＳＤ２南西側　弥生土器出土状況

ＳＤ２南東側　弥生土器出土状況

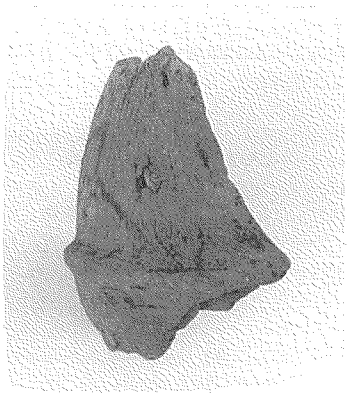
ＳＤ２出土　壺



ＳＤ２出土　甕・高坏

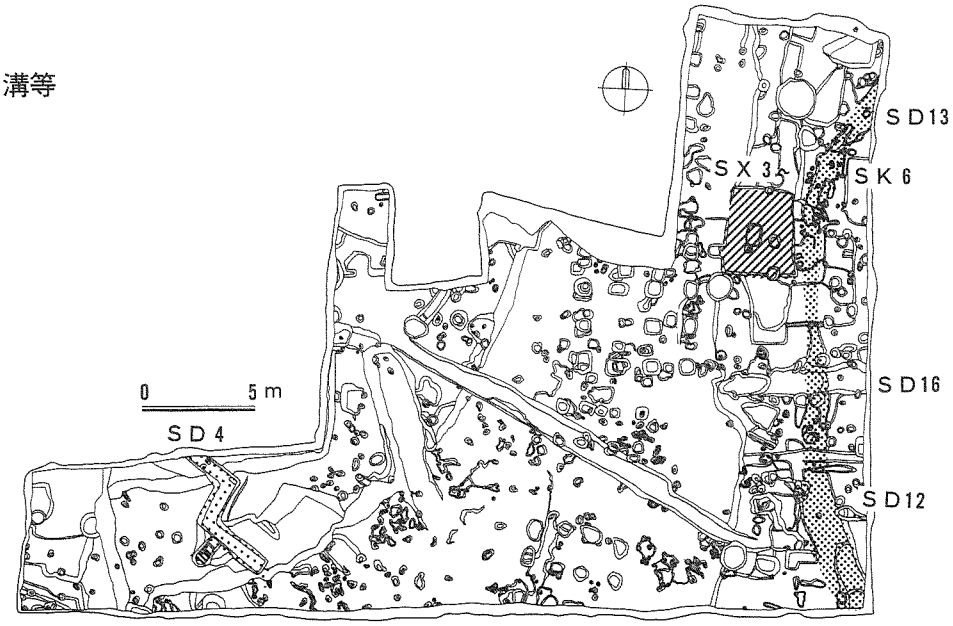
ＳＤ２出土　高杯

ＳＤ２出土　平瓶



ＳＤ２出土　手焙形土器

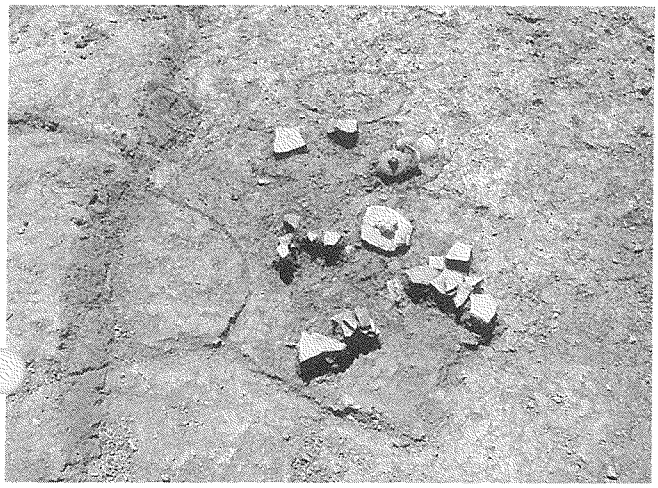
図13　溝等



ＳＤ12(図13)　調査区南東側で検出されている。幅は1.2～２m、深さは10～15cm、北から南南東方向に走る。埋土は黒褐色土で下位は地山ブロックを含む。ＳＤ13に続く溝と考えられ、全体では北北東から緩やかに西に弧を描き、南南東に至っている。土師器甕、須恵器有蓋高杯･平瓶等がまとまって出土している。図14の１は有蓋高杯、脚は比較的低く、透かしはない。２の杯は底部が面をもちヘラ削り調整がされ、体部は丸く、口縁はやや斜めに延びて長い。３は杯、不安定な底部はヘラ削り調整がされ、蓋受けや立ち上がりは低い。

ＳＤ13(図13)　調査区北東側で検出されている。幅は0.6～1.3m、深さは12～14cm、北北東から南に走る。ＳＢ３・４に切られている。埋土は黒褐色土、須恵器甕の破片が集中して出土している。図14の４は北側で出土した甑である。

ＳＤ16(図13)　調査区東端中央で検出されている。幅は約1.3m、検出長は約6.5m、深さは東側で約40cm、中央の凹みで約55cm、西側は別の遺構と重なっているとも考えられるが、約65cmである。埋土は黒褐色土を主体とする。ＳＤ12・13との関係はＳＤ16の埋土が残っていたことからＳＤ12・13→ＳＤ16となる。図14の５～９が出土している。５は中央部の凹み下位から出土した蓋である。天井部は平らで口縁部は直線的に僅かに外に開く、天井部に回転ヘラ削りが施されている。５世紀後半のものと思われる。６は無台椀、底部には回転糸切り痕がみられ、ヘラ記号「＋？」がある。７の蓋は口縁が内側に折り曲げられている。８の蓋は天井部が偏平で器高は低く、偏平な宝珠を有し、口縁端部は内側に屈曲させている。９は土錘である。８世紀後半～９世紀前葉と思われる。

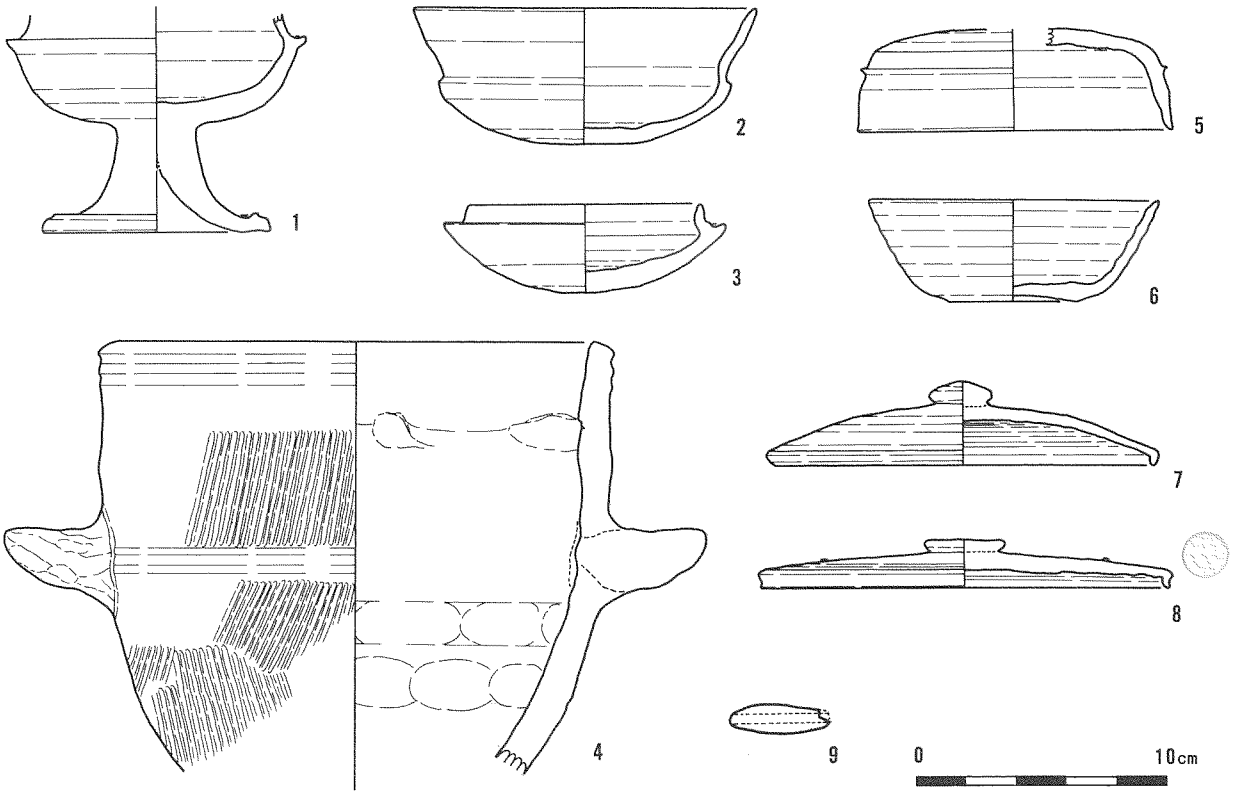


ＳＤ12　須恵器等出土状況

ＳＤ13　須恵器等出土状況

ＳＤ16

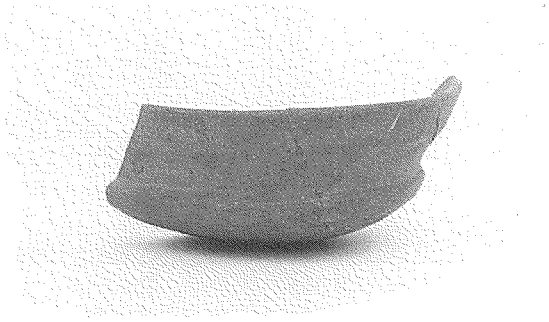
図14　ＳＤ12(１～３)・13(４)・16(５～９)出土



ＳＤ12出土　高杯

ＳＤ16出土　杯

ＳＤ12出土　杯

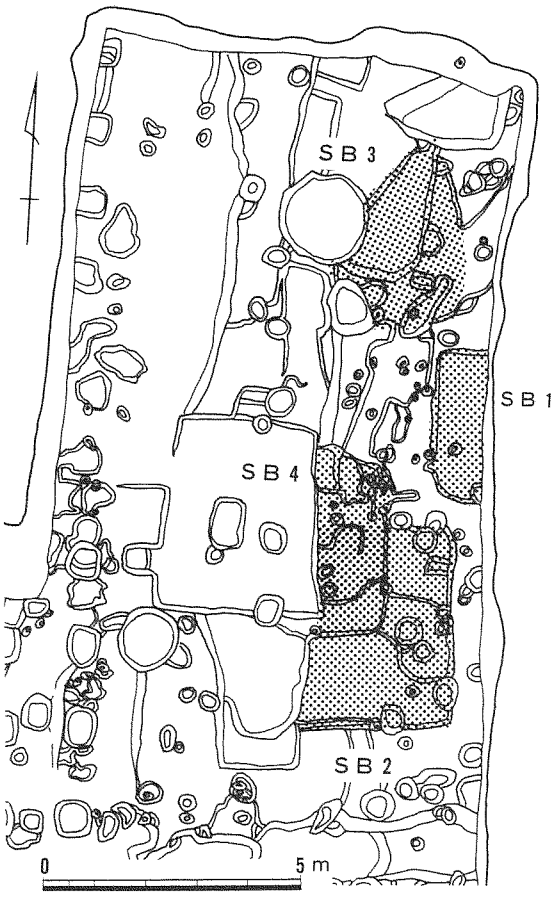


ＳＤ12出土　杯

ＳＢ１(図15)　調査区東端で西半分が検出されている。南北長は約３m、深さは地山面より約15cmを測る。北側のコーナーは直角を呈し、南側はかなり丸みを呈している。周溝、柱穴は確認できなかった。埋土は地山ブロックを多く含む暗灰褐色土である。埋土中から、土師器甕(図18の１)、須恵器杯・杯蓋・椀等が出土している。土師器甕は底部の径の小さい平底で、体部外面は粗いハケメ、体部内面に指押さえが残る。杯蓋の端部は図化していないが、くの字状に折り返しており、８世紀代後半と考えらえる。

ＳＢ２(図15)　調査区東側中央で検出されている。ＳＢ４と北西で重複し、西側は攪乱溝に切られている。南東コーナーは直角、北東コーナーはやや丸みがある。南北長は約４m、東西検出長は約３mを測る。南側中央付近に周溝があるが、他は確認できなかった。地山からの深さは最大で約20cm、周溝の幅は約22cm、深さは床側地山面から約４cmである。埋土は淡灰褐色土で、土師器甕(図18の16、17)、須恵器杯(10･11･13)・杯蓋(14)・椀(９)・盤(12)等が出土している。16の口縁部はくの字状に屈曲し、器壁は薄い。17の底部は径の小さい平底であり、どちらも体部外面は粗いハケメ調整をしている。13は有台杯、口径が23.5cmの大型のものである。底部はヘラ削りされた平坦面をつくり、高台は内側に付けられている。高台は台形でハの字状に開く。10と11は無台杯、底部にはヘラ削り調整が見られる。14の蓋は天井端部に平坦面をつくり、口縁端部はくの字状に折り返している。丸味があり器高も高い。９は無台椀、底部は回転糸切り痕が残り、体部は直線気味に立ち上がり口縁部は厚みがある。12は盤、口縁端部はくの字状に折れ曲がる。ＳＢ２の東辺にあるＳＫ10は褐色シルトブロックと地山ブロックの混土で埋められ、不整形な形状をしている。埋土中から図18の６・７の杯蓋、８の盤が出土している。図化していないが、特に土師器甕の破片

図15　竪穴住居跡



竪穴住居跡(北から)

が集中している。ＳＫ10の北、東辺際に焼土の集中している箇所がある。焼土は固く焼け締り、１～２cmの厚みをもち方形を呈している。焼土の下は炭化物と焼土塊で埋った浅い落ち込みになっている。住居の内側に数基のピットがある。Ｐ275は床面で検出され、須恵器盤(図18の15)が出土している。柱穴と思われるが、他のピットは確認できない。ＳＢ４との先後関係は、ＳＢ４の埋土がＳＢ２の埋土を壊して残っていることから(図16)、ＳＢ２→ＳＢ４となる。

ＳＢ３(図15)　調査区北東側で南東コーナー付近が検出されている。隅丸方形を呈し、検出長は南北約３m、東西約2.5m、周溝はなく、地山面からの深さは約18cm、中央部分に方形の落ち込みがあり、ＳＢ３床面より約19cm深くなっている。この部分の埋土は地山ブロックを多く含みシルト質の強い暗灰茶褐色土、他の部分の埋土は暗褐色土である。落ち込みとＳＢ３の方向に違いがあり、ＳＢ３より古い別の遺構の可能性もある。柱穴と思われるピットは確認できなかった。埋土中から土器や須恵器が出土している。須恵器は７～９世紀前葉と思われる。ＳＢ３の南東で重なるＳＤ13との先後関係は、埋土の観察(図17)からＳＤ13→ＳＢ３となる。

ＳＢ４(図15)　ＳＢ２の北西に重なって検出されている。隅丸方形を呈する住居跡の東側である。南北長は約3.8m、東西の検出長は約1.4m、深さは地山面から約25cm、ＳＢ２から10cmほど深い。床面(地山面)は西に低くなり、中央部と北側には不整形な落ち込みがある。埋土は、暗褐色土、淡灰褐色土、暗灰褐色土等に細分され、検出当初は２基の土坑が並んでいると判断した程である。東辺の北コーナー近くにカマド状遺構がある。径50×70cm、深さ５cmほどの浅いピットの中には炭化物・焼土塊を含む灰褐色土があり、その土の上に須恵器椀(図18の３)が伏せてあり、まわりには土師器甕(図18の２)が散在している。このピットから住居の外に斜めに延びていく煙道状のピットがある。煙道状ピットの幅は12cm～15cm、長さは住居の壁から約50cm、25°の傾斜で上がり、端は直角に上がる。堅く焼締った焼土が須恵器椀の上位から煙道状ピットにかけて残っている。土師器甕は口縁が厚く、くの字状に折れ曲がり、やや受け口状を呈し、体部内外面に粗いハケ目調整がみられる。須恵器椀は無台椀である。図18の４・５は埋土中から出土した盤である。どちらも底部にはヘラ削り調整が見られ、５の高台はハの字状に外に大きく開き、口縁はくの字状に屈曲している。柱穴と考えられるピットは、Ｐ336、Ｐ337である。ともに埋土は淡茶褐色土、径約25cm、深さ約20cmである。

ＳＢ４　カマド状遺構

ＳＢ２　焼土

図16　ＳＢ２とＳＢ４

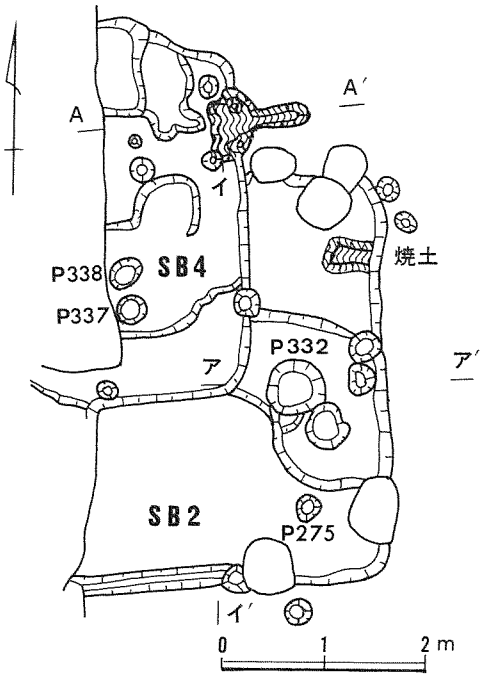
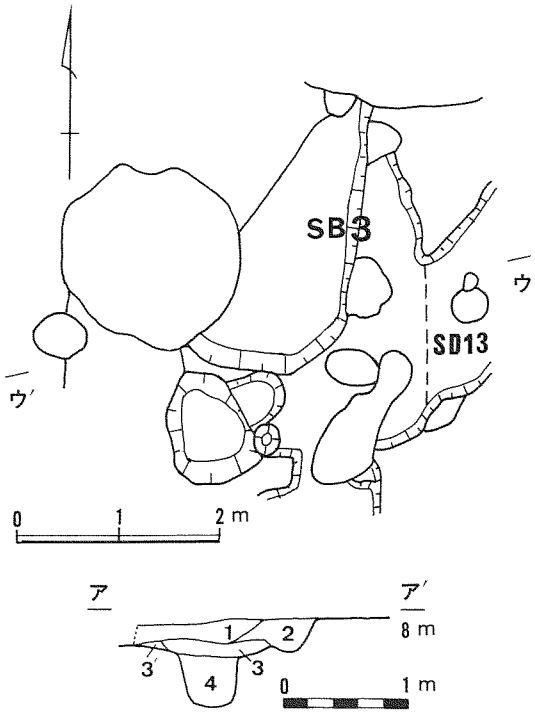
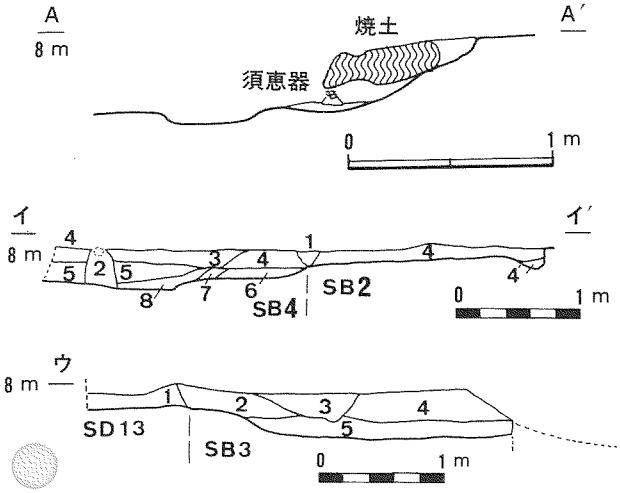


図17　ＳＢ３とＳＤ13

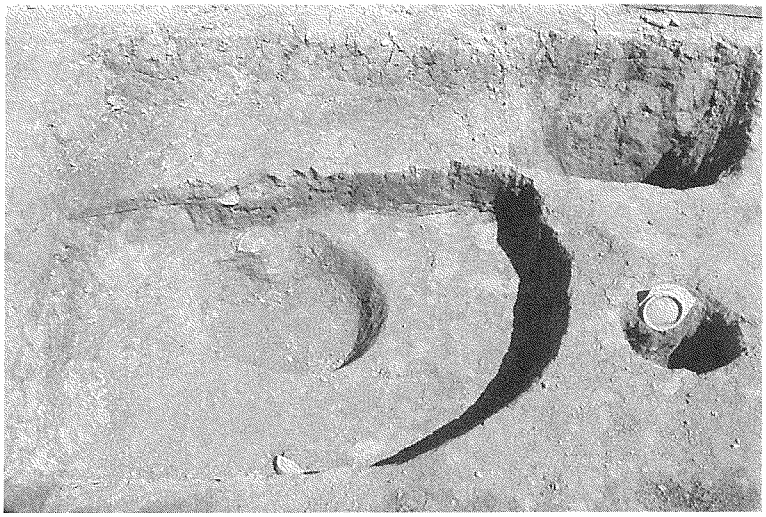




アーア′
1　淡灰褐色土　　2　灰褐色土
3、3′　黄褐色地山ブロックを密に含む褐色土
4　暗褐色土(Ｐ332埋土)

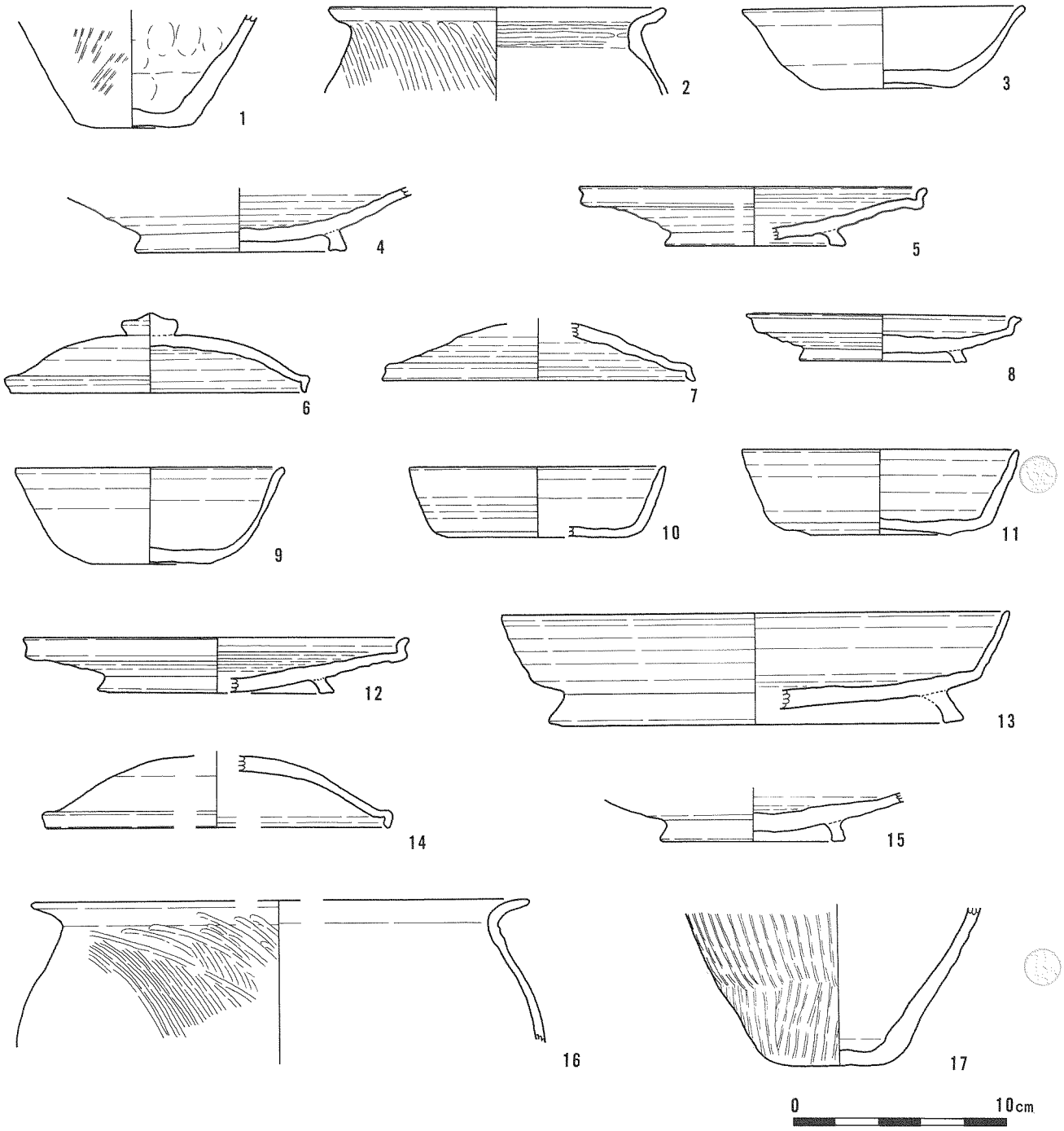
イーイ′
1　淡灰黄色土　　2　灰色シルト質土　　3　暗褐色土
4　淡灰褐色土(焼土・炭化物を含む)
4′　4に褐色土ブロックを含む
5　淡灰褐色土(黄褐色地山ブロックを含む)　6　灰褐色土
7　暗灰褐色土(黄褐色地山ブロックを密に含む)　8　暗灰褐色土

ウーウ′
1　黒褐色土　　2　暗褐色土
3　暗褐色土(砂がち)　　4　茶褐色土
5　暗灰褐色土(シルトがち)

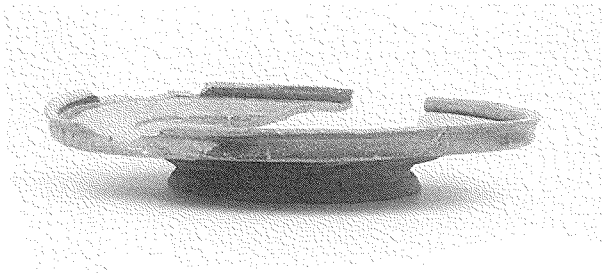


ＳＢ２内ＳＫ10とＰ275

図18　ＳＢ１(１)・ＳＢ２(６～17)・ＳＢ４(２～５)



ＳＢ４カマド出土　椀



ＳＢ２出土　盤

掘立柱建物1（図19）　調査区の北西端の壁際で南北に並んだ4基のピットが検出されている。全容は不明だが、ピットは方形を呈し、深さは検出面（ＳＤ２底面）から10～20cm、標高では7m前後である。埋土はいずれも黒味のある暗灰褐色土、柱間の距離は、約1.5mを測る。南北軸はＮ３°Ｅである。

掘立柱建物2（図19・20）　掘立柱建物1の南側に位置する。南北4基、東西4基が並び、Ｐ134は規模・形状がやや異なるが総柱式と思われる。ピットは、60～90cmの正方形か長方形を呈し、深さはＳＤ２底面より40～60cm、標高では6.8～6.9m前後、埋土は灰褐色～暗灰褐色土である。Ｐ134は30×40cm、深さ約20cmである。柱間の距離は、南北が約1.7m、東西が約1.5m、建物の全長は南北約5.1m、東西約4.5mを測る。南北軸はＮ３°Ｗである。

掘立柱建物3（図19・20）　掘立柱建物2と重なっている。南北・東西3基ずつが検出されている。ピットの規模や形状はマチマチで大きさは40～70cm、深さはＳＤ２底面から10～60cm、標高では6.7～6.9m、方形を呈するものが多い。中央部は、位置は若干ずれるように見えるが、Ｐ135が該当すると思われる。西側の列はピットが重なっているためわかりにくいが、Ｐ70・68の北側・73の北側と思われる。また、Ｐ146は掘立柱建物2と重複していると思われる。柱間は南北・東西とも約2m、東西の全長は約4mである。南北軸はＮ３°Ｗである。

掘立柱建物4（図19・21）　掘立柱建物2・3と北側が重なっている。検出されたのは、南北4基・東西3基の総柱式である。他に比べるとピットの規模はやや小さく30～55cm、深さはＳＤ２底面から20～45cm、標高では6.9～7m前後、方形を呈している。埋土は灰褐色～暗灰褐色土である。南北の柱間は約1.4m、東西の柱間は約1.2m、建物の全長は南北約4.3m、東西約3.6mである。南北軸はＮ１°Ｅである。

図19　掘立柱建物

図20　掘立柱建物２・３

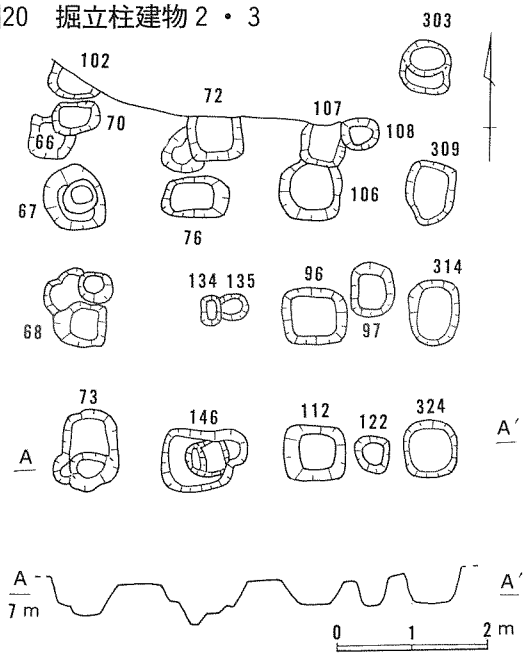


図21　掘立柱建物４

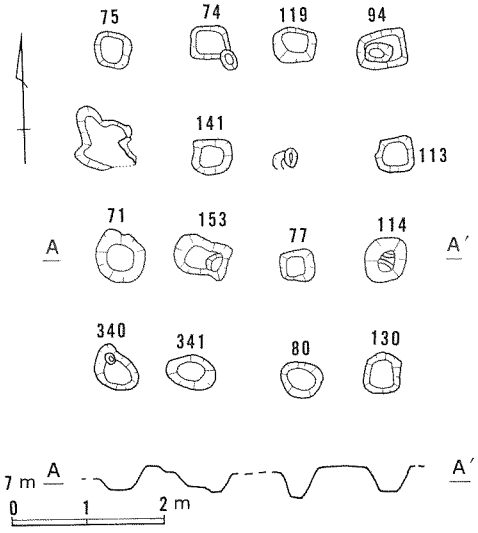


図22　掘立柱建物５

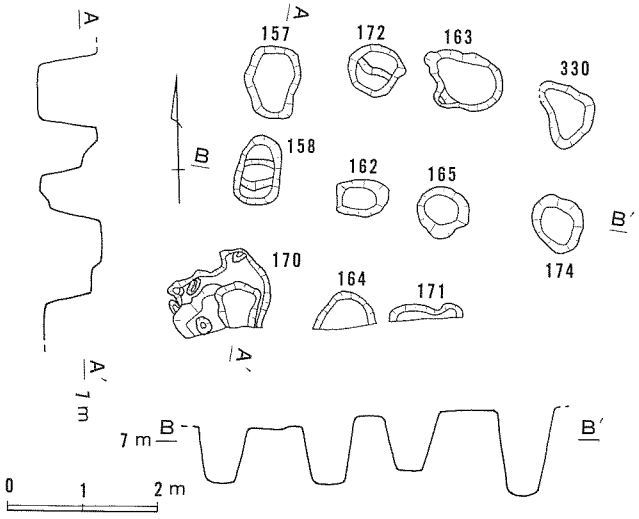
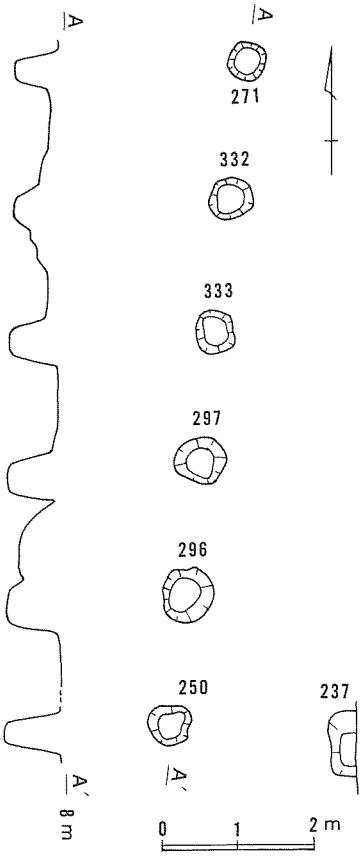


図23　掘立柱建物６



（番号はピットの番号）

掘立柱建物２・３（西半区）東から

掘立柱建物５（図19・22）　調査区の南端で東西は４基、南北は３基が検出されている。いずれも径60～70cmの不整形な楕円形を呈している。深さはＳＤ２の底面より70～80cm、標高は6.3～6.5m前後と深い。埋土は灰褐色～暗褐色土である。検出した部分は総柱で南北柱間は約1.7m、東西柱間は約1.3m、東西の全長は約3.9mを測る。南北軸はＮ11°Ｅである。

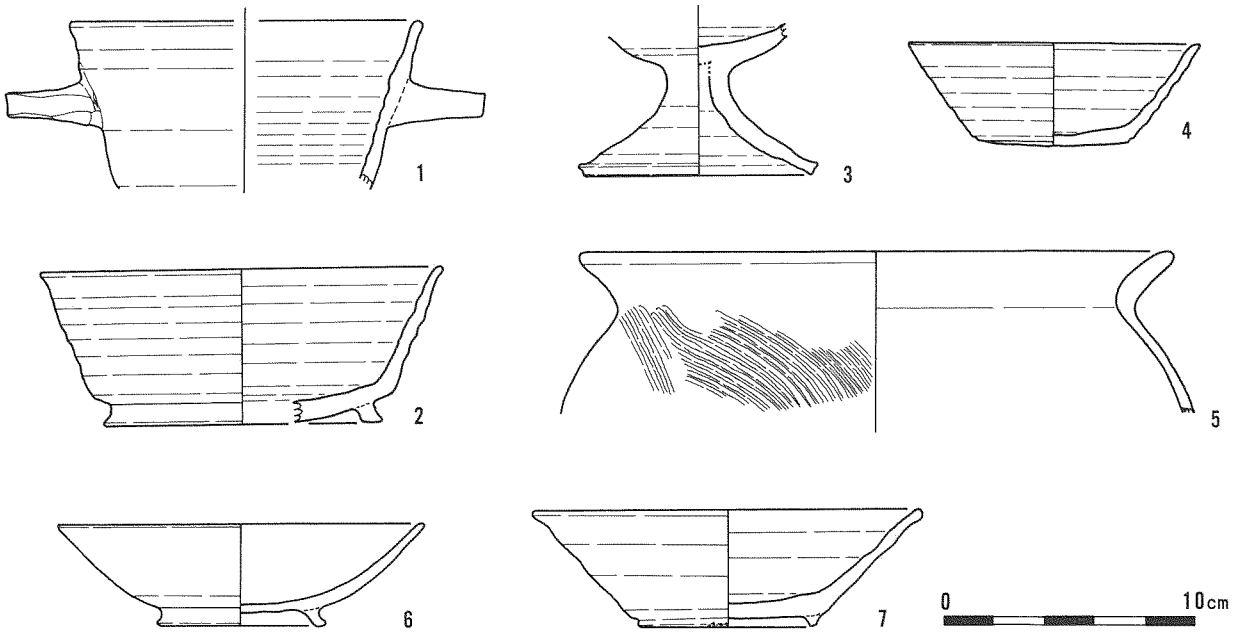
掘立柱建物５

掘立柱建物６（図19・23）　ＳＤ２の東側で南北に６基、東に１基が検出されている。南北の柱間は約1.75m、全長は約8.75m、東の柱間は約2.4m、南北軸はＮ７°Ｅである。ＳＤ２の底面で検出されている柱穴とは形状が違い、Ｐ237以外は径50～70cmの円形を呈している。深さは検出地山面より60～70cm、標高では7.3m前後である。埋土は暗褐色～暗灰褐色土である。ＳＢ２の内側に位置するＰ332とＳＢ２との前後関係はＳＢ２・ＳＫ10の埋土がＰ332の埋土の上にあることから(図16)、掘立柱建物６→ＳＢ２となる。

その他の柱穴　調査区北東側で柱穴列状のピットが数基検出されている。Ｐ201、Ｐ207、Ｐ209、Ｐ318は、径30～40cmの円形を呈し、深さは標高で7.3m前後、柱間は約2.3mを測る。図24の７はＰ207から出土した山茶碗である。体部が直線的に立ち上がり体部と底部の境が明瞭であり、瀬戸窯編年(註1)の６型式に該当すると思われる。体部内面には煤が付着している。Ｐ204、Ｐ210、Ｐ211も柱間が約1.4mで並び、更に、Ｐ212、Ｐ287と続くと思われる。

ＳＸ３（図13）　ＳＢ４の西側に位置する。3.9×3.1mの長方形を呈し、深さはＳＢ４より20～30cm深く、

図24　ＳＸ３（１～４）・ＳＫ６（５・６）・Ｐ207（７）出土



ＳＸ３・ＳＫ６

ＳＤ４

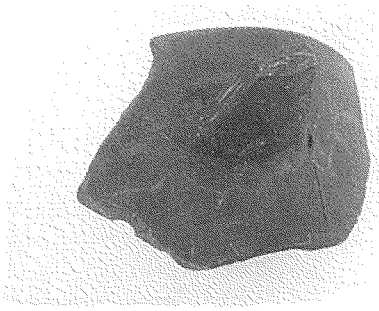
東側の地山からは約50cm深い。埋土はシルト質の強い暗灰褐色土である。ＳＢ４と重なる部分に現代攪乱があり、ＳＢ４の内側地山面の高さまで削られているため、ＳＢ４との先後関係は確認できない。埋土中から図24の１～４が出土している。１は双耳杯、板状の把手が体部中央に付き、器高は高い。２の有台杯は、胎土は粗雑で大きな砂粒を含む。高台はハの字状に開いている。３の高杯は脚の裾は広がり、端部は面をつくる。４の椀は底部に糸切り痕が残り、口縁端部は面をつくる。

柱穴

ＳＫ６(図13)　ＳＤ13と重なっている。ＳＫ６の埋土が残っていたことから、ＳＤ13→ＳＫ６となる。埋土は暗茶褐色土で埋土中から甕(図24の５)と灰釉椀(６)が出土している。甕の口縁はくの字形に折れるが、他から出土している甕口縁に比べ立ち上がっている。椀は焼成が不十分で、高台は台形を呈し外側に開いている。内面には煤が付着している。９世紀前半に該当すると思われる。

ＳＤ４(図13)　調査区西側で検出されている防空壕である。幅は80cm前後、深さは現地表から約1.6m、北側へやや深くなっていく。ジグザグに掘られ、検出した全長は８mほどだが、北の崖に向かってまだ続いている。出入りの段階は、端ではなく途中に付けられている。

註１　藤澤良祐　－瀬戸古窯址群Ⅰ－瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ　瀬戸市歴史民俗資料館　1982



ＳＸ３出土　双耳杯

Ｐ207出土　山茶碗

Ⅳ　まとめ

正木町遺跡での市教育委員会の調査は、今回で５回目となった(註1)。今回の調査地点は遺跡推定範囲の西端から遺跡外に位置している。そのため調査区は台地の端と斜面の途中に設定され、西側は地山面が削られ台地から落込んだ土が埋まっていると予想をしていた。しかし、地山は調査区の西端まで残存し、弥生時代の遺構が確認されている。西側にある木材工場を建設する際に崖を削ったといわれることからもかっての崖面は堀川近くに位置していたのであろう。

現在までにわかっている調査の主な結果をまとめると以下のようである。

弥生時代　４次までの調査では弥生時代の遺構は検出されてなく、遺物が少量出土しているだけである。今回は方形周溝墓と考えられる溝が検出され、中期後葉の土器がまとまって出土している。また、遺構は不明だが、後期の土器もまとまっている。今回の調査区あたりが墓域となっていたと考えると、住居跡等生活地域がどこに存在するのかが課題となる。隣接する伊勢山中学校遺跡でも弥生時代の遺構や遺物の出土例は多くないが、第５次調査(註2)では中期後葉の遺物を出土する住居跡が検出されており、関連に興味がもたれる。弥生時代の様相については、今後の調査の結果を待ちたい。

古墳時代　第３・４次調査では住居跡が検出され、また、初期須恵器が出土しており、正木町遺跡の中心的な時期と考えられている。今回は、５世紀～７世紀代の須恵器が出土している。この時期の遺構と考えられるものは、ＳＤ12・13であるが、すべての遺物を整理していないため確定はできない。掘立柱建物の位置には、後に住居跡がつくられ、この住居跡からは８世紀後半の須恵器等が出土していることから、掘立柱建物は古墳時代に属する可能性もある。

奈良・平安時代　４軒の竪穴住居跡や溝等が検出され、この時期の遺物が最も多く包含層から出土する。これまでの調査でも遺物は多く出土しており、遺構としては、第３次調査で３軒の竪穴住居跡が検出され、平成７年に南山大学が行った調査では井戸が検出されている。今回検出された住居跡のうちＳＢ４ではカマド状遺構が比較的良好な状態で検出されている。天井部は残存していなかったが、両側壁と煙出しのピットがあり、カマドの構造を考える好材料を得ることができた。出土遺物の時期としては、８世紀後半から９世紀が中心である。

中世　今回の調査では13世紀代の遺物を出土する柱穴を検出しているが、遺物の量は少ない。これまでの調査で検出されている中世の遺構は、第１次調査の井戸、柱穴、第３次調査の掘立柱建物、それに、第３・４次調査で検出されている溝等である。隣接する伊勢山中学校遺跡でも類似する遺構があり、このあたりに城館が存在したことを推測させるが、時期や相互の関係は不明である。

近世　土坑が検出されているが、遺物の量は少なく、どのような地域であったのか不明である。

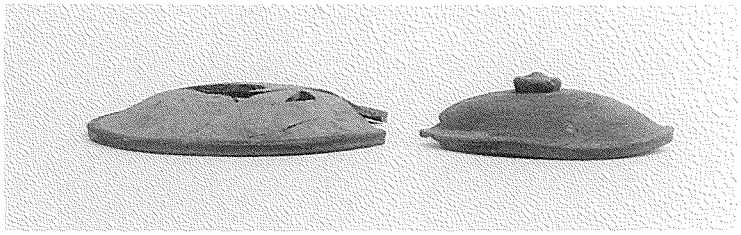
正木町遺跡は古墳時代に集落が営まれ、平安時代まで継続される。特に８世紀後半から９世紀前半の遺物は各調査で多く見つかっていることから、この頃が集落としての規模がもっとも大きかったと考えられる。鎌倉時代以降、井戸や大溝等が造営されており、戦国時代までの間に城館等が存在したと思われるが、遺物の希薄な地点もあり、土地利用は平安時代とは違っているのではなかろうか。

今回の調査成果のうち、特徴的なことは、竪穴住居に伴うカマド状遺構が良好な状態で検出されたことと６軒の掘立柱建物の検出である。市教育委員会が行った市内の遺跡調査において、掘立柱建物の検出は柱穴状のピットが１列に数基並ぶ例はあるが、今回のように建物の規模がわかることは珍しい(註３)。特に、掘立柱建物２・３・４・５は総柱式の建物であり、一般的な住居ではなく、倉庫のような建物であったと考えられる。重なっているものもあるが、１から５まではほぼ南北に並んだ位置にある。倉庫だけが単独であったとは考えられず、この建物(中に入っているもの)を管理する住居建物(人)があったと考えるのが必然である。この可能性のある建物は掘立柱建物６である。掘立柱建物６は全容は不明だが、他の掘立柱建物に比べて柱穴の深さ(底面の標高)が浅く、南北長が倍近くある大形の建物であり、倉庫とは別の建物と思われる。しかし、日常品と考えられる遺物以外は出土していないし、各掘立柱建物の時期が特定できないため、現段階では、古墳～奈良時代の地域支配に関連する施設のひとつとしか言えない。ＳＤ２は、掘立柱建物の後の時期に掘られ、竪穴住居跡と同時期か少し早い時期に埋められていると思われる。ＳＤ２については、幅は10m前後、深さは現地表から1.2～1.4m(地山からの深さは0.6～0.9m)あり、埋土は均質な砂シルトで埋土の様子から水が流れていたとは考えられないことが判明しているが、どのような性格の溝であるのかはわからない。掘立柱建物・ＳＤ２の時期や性格、竪穴住居跡との関連等、課題が多く残されている。

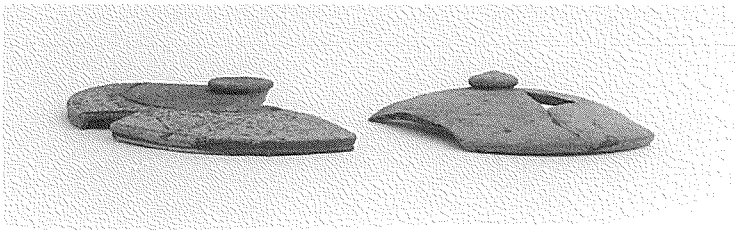
註１　正木町遺跡第６次発掘調査が平成７年10月～11月にかけて行われ、古墳時代の住居跡や中世のＶ字状の溝等が検出され、古墳(５世紀前半)～近世の遺物が出土している。特に、奈良・平安時代の遺物の量が多いという。
註２　名古屋市見晴台考古資料館　伊勢山中学校遺跡第５次発掘調査概要報告書　名古屋市教育委員会　1995
註３　正木町遺跡第３次調査では中世の掘立柱建物が検出されている。

参考文献

楢崎章一　－猿投窯の編年について－愛知県古窯跡群分布調査報告(III)　愛知県教育委員会　1983
斉藤孝正　－東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－古代の土器研究　古代の土器研究会　1994
斉藤孝正　須恵器集成図録　第３巻　東日本編Ⅰ　雄山閣出版株式会社　1995



ＳＢ２出土　蓋



ＳＤ16出土　蓋

裏表紙写真　東半区全景

正木町遺跡－第５次調査の概要－

1996年３月29日発行

編集　名古屋市見晴台考古資料館

発行　名古屋市教育委員会

印刷　名古屋大気堂